

東京圏における映画館の出現と消滅  
—旧映画街の特殊性と映画館復活手法の提案—

理工学研究科建築学専攻  
建築設計研究

MJ22036 おがわ ゆうじ  
小川 裕司

指導教員 西沢 大良

1. 研究背景

映画館最盛期と言われた1960年、東京では600館を超える映画館が建ち並び、街中は映画街が溢れていた。当時の映画館は世代、性差、人種を超えて集客した史上初の近代集客施設であった。しかし、1970年代以降急激なテレビの普及によって映画産業は大打撃を受け、東京の映画館は激減した。そんな中、現在の東京の個性ある商業地の歴史を辿ると元映画街であった事例が多数見られ、映画館（＝史上初の近代集客施設）が上記の商業地を形成する根源的な役割を担っていた可能性がある。代表例では浅草/渋谷/新宿/池袋などは元・映画街であり、これらの街の個性的な商業空間は映画館がルーツとなっていると考える。



図1 1960年代の新宿ミラノ座のチケット売り場に並ぶ列

2. 研究目的

映画館最盛期(1960年時点)に映画館が立地し、その後映画館が閉館した街を「旧映画街」と定義し、調査編では旧映画街の分析にて下記の2つの目的を示す。

①映画館が立地したことによる当時の旧映画街へ影響を模索する。

②現在の旧映画街の特徴や映画館立地による痕跡を見つけ、映画館による街の依存要素を見つける。

設計編では、旧映画街を敷地対象に映画館の復活させ、論文編から得た60年代の映画館が巻き起こした特殊な都市空間を存続させる設計手法を模索する。

3. 研究対象

東京23区の旧映画街を研究対象とする。具体的には映画年鑑1960年版 別冊映画便覧に記載された映画館名簿を参考に東京23区における映画館560館のうち住宅地図より確認できた529館を対象とし、本論6ページに映画館リストを記載する。

| 映画館名   | 住所             |
|--------|----------------|
| 丸の内日活  | 東京都千代田区有楽町1-2  |
| 丸の内名画座 | 東京都千代田区有楽町1-12 |
| スカラ座   | 東京都千代田区有楽町1-1  |
| TA有楽座  | 東京都千代田区有楽町1-2  |

表1 1960年に存在した東京23区の映画館リスト例

4. 論文構成

本論では四章構成をとる。第1章から第3章までを調査編、第4章は設計編としている。

第1章：1960年代の映画館の歴史や立地傾向から閉館後の建築用途について分析する。

第2章：映画館周辺である旧映画街の建築用途、GL階の業種、1960年の当時の街並みとの比較など詳細な分析を行い、映画館の求心性の残存を明らかにする。

第3章：閉館後の旧映画街が映画館の何に依存しどのような変化が起きたのか明らかにするため、映画館の上映作品の作風が街並みに影響を与えた可能性を探る。

第4章：第一から第三章にて調査から導き出した旧映画街に対して設計提案を行う。終章では調査編から設計編を通して考察したことをまとめ、総括へと結ぶ。

5. 映画館の変遷と現在の旧映画街

5.1 映画館の立地傾向

1960年に映画館があった街区を「映画館街区」と称する。広域的な立地傾向では一館のみの映画館街区が3/4以上を占めていることから映画館同士は少なくとも強く依存せずに幅広く立地することもでき、これは当時の映画館の集客力が強力だったために自由に自由に立地することができたといえる。狭域的な立地傾向では映画館の角地の割合に着目すると、本論1-1で記述した映画館建築の特徴より巨大な看板による強い商業要素と入場券を購入するたまり場の要素が角地との相性の良さを示唆でき、139棟（約1/3）が角地に立地していることから映画館は角地に建設されやすかったといえる。

5.2 閉館後の建築用途

閉館後の建築用途は、前身が映画館（いわば商業施設）だったが故にその後も商業施設にならずに、プライベートからパブリックな用途まで様々である。このような建築用途の多様さは映画館の建築面積の大小が関係していると推測する。特に建築面積が小さい映画館は、Pr用途（個人商店や住宅系など）になる傾向があり、建築面積が大きい映画館はPb用途（商業施設や娯楽施設など）になる傾向がある。当時は、映画館の新館が次々と建設され、スクリーン一つで多大なる人の集客が起きていたので、100席の小規模の映画館から800席を超える大規模な映画館まで様々（さらに経営者も個人から企業まで様々）であり、それらが閉館後の建築用途の多様さに関係があったといえる。

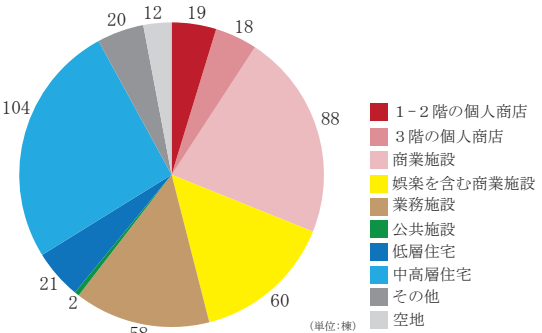


表2 閉館後の建築用途

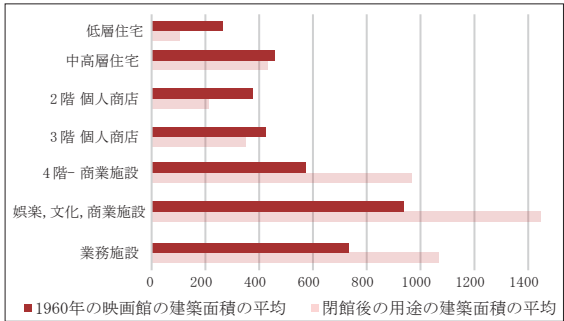


表3 建築面積からみる閉館後の用途の関係

6. 映画館の求心性の痕跡と商業通りの変化

6.1 建築用途からみる旧映画街

映画館の求心性が消えた後の旧映画街を分析するために閉館後の建築用途が戸建・集合住宅及び個人商店の162棟を含む旧映画街133集積に対して分析を行う。さらに133集積の建物用途図を作成し、ほぼすべての集積において個人商店と古建築が立地していることが分かった。さらに個人商店、古建築、住宅用途が混在している事例も多く、全体の用途の棟数割合では15～30%の割合で拮抗している。

これらの旧映画街は当時娯楽、商店、住宅がある街であり  
いわば「生活圏の最小単位」であった。さらに映画館は全世  
代の集客があったが故に、閉館後もその痕跡として様々な業  
種の商店や他用途と共存できる街に変化したと推測できる。



図2 建築用途塗例

## 6. 2 業種からみる旧映画街

6. 1について詳細に分析するために分析対象をさらに40集積  
まで絞り込み、GL階の業種に着目する。ほぼすべての集積内  
に飲食料品、衣料品、飲食業、美容業、医療福祉があり、「  
衣食住＋医」のすべてが揃っている。さらに集積内では様々  
な業種が立地しており、40集積のうち過半数が10業種以上、  
1/4は15業種以上ある。旧映画街において街の求心要素であ  
った映画館は様々な世代を集客したことで周辺に多様な業種が  
発生し、閉館後もその特徴が残され、互いに共存し合ってい  
ると考える。代表例として高円寺の集積では、映画館開館を  
中心に高円寺駅から新高円寺を結ぶように商業通りが活性化  
し、この通りは「映画館通り」と1960年代から呼ばれ、当時  
からこの通りは生活必需品がすべてそろっている通りであ  
ったが故にその特徴は現在も残り、映画館がその商業通りを特  
徴づけたのである。



図3 業種塗例

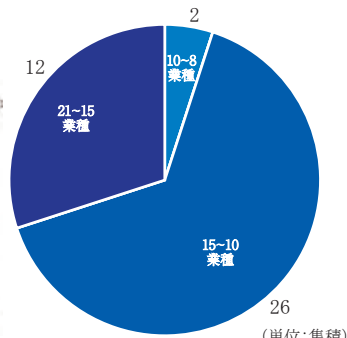


表4 集積内の業種の割合

(単位:集積)

## 6. 3 映画館の求心性による商業通りの変化

1960年の住宅地図から個人商店をQGIS上でプロットし、当  
時の商業通りを図として作成する。その後現在の業種塗と比較  
し、商業通りの変化をみると、映画館が立地したことで既存  
の商業通りが映画館の方へ延伸した「商業通り延伸型」の  
集積が確認できた。当時の映画館は戸建てより建築面積が大  
きかったため、敷地選定時に既存の商業通りに面することが  
できず、少し外れて立地した可能性は少なくない。その後、  
映画館には目的を持って多くの集客が起き、既存の商業通り  
から映画館の方へ新たな商店が立地したことで、結果として  
商業通りが映画館の方へ延伸したと推測する。



図4 商業通りが映画館の方へ延伸した事例

## 7. 上映作品の作風による街並みへの影響

### 7. 1 1960年代の配給会社と映画館

1960年代の映画館と映画制作会社は2つの大きな特徴があ  
る。1. 各映画館が上映作品の系統を指定していたこと。その  
多くは大手配給6社（松竹、東宝、東映、日活、大映、新東宝）の

いずれかあるいは複数社を指定していた。2つ目は1970年代  
までの配給会社は制作、配給、興行まで一貫して行っていた  
ため、それぞれの配給会社によって作風に大きな違いがあ  
った。これらの2つの特徴により、各映画館によって「主要な  
客層」と「映画館のイメージ」が定着され、それらが街並み  
に影響を与えた可能性がある。

### 7. 2 大手配給6社の旧映画街

#### 【松竹映画の旧映画街】

松竹映画の作風である「下町の風情がある作品」と主な客層  
であった「女性や年配の集客」の2つの要素が老舗のお店が  
多数残され、昔ながらの商業通りが形成されたと考える。

#### 【東宝映画の旧映画街】

東宝の作風である「多彩なジャンルの作品」と主な客層であ  
る「老若男女の含む全世代」の2つ要素が業種の多様さ然り  
店舗の多様さが街並みに反映されたのではないかと考える。

#### 【東映映画の旧映画街】

東映映画の作風である「娯楽映画（アクション、時代劇、ヤ  
クザもの）」と主な客層であった「男性の集客」の2つの要  
素が旧映画街の街並みに影響を与えたことで、バー、スナッ  
ク、居酒屋、酒屋が立地し、閉館後の現在までもその集客は  
存続したと考える。

#### 【日活映画の旧映画街】

日活映画の作風である「若者男女向けのポップな作品」と主  
な客層であった「若い男女の集客」の2つの要素が流行に強  
い街になり、若者人気のお店や外国籍の料理が多く立ち並ん  
だと考える。

#### 【大映映画の旧映画街】

大映映画の作風である「挑戦的で多彩なジャンルの作品」と  
主な集客である「男性や映画ファン」の2つ要素が珍しいお  
店や市場の狭いお店が立地しやすい受け皿的な要素が街並み  
に反映されたのではないかと考える。

#### 【新東宝映画の旧映画街】

新東宝映画の作風である「独特の世界観」と主な集客である  
「新東宝ファン」の2つ要素が映画界隈が集まったことや万  
人受けしない映画館が立地したが故にバーやスナックが立地  
しやすい要素が街並みに反映されたのではないかと考える。

## 8. 設計

### 8. 1 計画/敷地

敷地対象は世田谷区三軒茶屋（最盛期には4館の映画館（松  
竹/東宝/東映/大映）であり、周辺も十分に作風影響を受け  
た街並みであるが、今後開発が大きく進み多数の個人商店が  
失われる恐れがあるため、現代の新しい映画館の在り方を提  
案し、街並みの存続を図る。



図5 現在の三軒茶屋の街並み

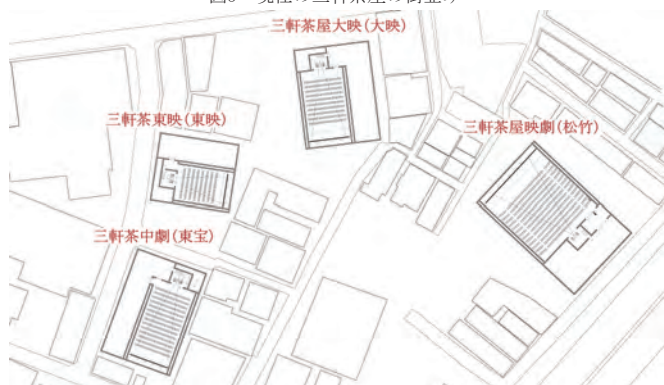


図6 1960年の三軒茶屋に存在した映画館